誠実
親和

安田教育振興会四十年の歩み

安田教育振興会
四十年の歩み

〈特集〉

㈠ 扇屋と育英奨学事業の半世紀
扇屋小史

㈡ 座談会「戦時下の青春」
安田教育振興会の歩み

目次

ごあいさつ　安田敬一 …… 1

特集（一）

扇屋と育英奨学事業の半世紀 …… 7
一．はじめに …… 10
二．扇屋小史 …… 12
三．安田教育振興会の歩み …… 76

第一章　チャレンジしています …… 103
Ⅰ．私にはめざす夢があります …… 105
―この十年間の奨学生応募作文から―
Ⅱ．学校生活を楽しんでいます …… 115
―奨学生からの手紙―
Ⅲ．充実した毎日です …… 119
―卒業生からの手紙―
Ⅳ．元気で頑張っています …… 126
―卒業生からの近況報告―

第二章　保護者からの手紙 …… 139

第三章　活動年表 …… 143
Ⅰ．事蹟（平成21年～令和元年5月） …… 145
Ⅱ．役員（理事・監事・評議員） …… 150
Ⅲ．奨学生選考委員 …… 152
Ⅳ．歴代理事・監事・評議員一覧 …… 153
Ⅴ．歴代選考委員一覧 …… 157
Ⅵ．奨学生一覧 …… 159
扇屋奨学会　第一回～第十回（昭和36年4月～昭和47年3月） …… 159
安田教育振興会
第一回～第三十一回（昭和54年～平成21年） …… 163
第三十二回～第四十一回（平成22年～令和元年） …… 172
Ⅶ．教育研究活動助成一覧 …… 182

第四章（特別寄稿）これからは国際観光の時代　鈴木　勝 …… 191

特集（二）

座談会「戦時下の青春」 …… 203
「三人三様苛烈な日々」
中江利忠　土井共成　安田敬一

編集後記 …… 215

扇屋奨学会
第１回決定通知交付式

第四章
特別寄稿
これからは国際観光の時代

鈴木　勝
日本観光ホスピタリティ教育学会会長

鈴木さんは「扇屋奨学会の第一回生（昭和36年）。苦労しながら県立安房第一高校（現・安房高校）、早稲田大学を卒業後、旧・日本交通公社（現ＪＴＢ）に就職、長年にわたり世界各国を回って観光ビジネスに従事、わが国の国際観光ビジネス界の第一人者である。大阪観光大学名誉教授、前・桜美林大学教授。観光関係の著書多数。

はじめに

中学を卒業し、すぐに実社会で働く予定でしたが、運よく高校に進学でき、二年次に「扇屋奨学会」スタートに接し、幸いにも最初の奨学生に選ばれました。その結果、勉学に励むことができ大学への道が開け、希望の大学・学部に入学することができました。

大学時代に、「日本人の海外渡航自由化」（1964年）に遭遇し、〝海外雄飛〟の夢を商社から旅行会社に転換させ、ＪＴＢ（旧・㈱日本交通公社）に入社しました。世界の多くの国々への出張以外に、オーストラリアや中国に約十年間駐在し、学生時代からの夢を実現させました。サラリーマン生活三十三年後に、国際観光ビジネスの経験を活かし、この専門分野では珍しい大学教授に転身し、十七年間、今日まで教壇に立ち続けました。現在は、ライフワークとして、日本政府が推し進める「観光立国ニッポンへの道」の一翼を担い、その実現のために国の内外を飛び回っています。この六十年近くの人生が、迷いつつも結果的には、自分の望み通りに進んだのも、どうやら、「扇屋奨学会」の奨学生に選ばれたことが〝転機〟だったのではないかと思っています。

Ⅰ　父親の海運業が倒産

(1) 中学卒業の予定が、大学進学へ

南房総市（旧・安房郡岩井町／富山町）の海運業を営む家庭に生まれ、次男の身分ですが、将来は、房総半島と首都圏を行き来する〝海〟の仕事に従事するものと思っていました。ところが、私が小学校入学直前に、事業をさらに拡大すべく購入した大型船が台風で沈没。父親は、〝陸（おか）に上がったカッパ〟同然で、陸上での仕事も上手く行かず、かなりの借金を残したまま死去。もちろん、この境遇では私は当然、中学校では「就職コース」に属し、卒業後は働きながら夜間高校に行く覚悟でした。夜間高校通学を約束したある大手鉄鋼会社への入社希望を就職担当の先生に依頼していたのですが、手違いで受験することができず、迷った結果、高校進学となりま

した。近くに「水産」、「商業」、「農業」などの高校がありましたが、将来の自分の職業を想い描くことができず、普通高校の「安房高校（旧・安房第一高校）」を選んだ次第です。私は、当然、高校卒での就職準備をしていたのですが、二年次に、「扇屋奨学会」第一回奨学生に選ばれて、人生がガラリと変わっていきました。

現金収入の少ない母子家庭にとり、毎月の奨学金のおかげで、落ち着いて勉強ができ、その結果、成績も上がっていきました。周囲では多くの大学進学希望者がおり、「どこの大学に?」や「僕はあの大学へ！」などの会話が聞こえてきていました。その後、大学の特別奨学生試験があり、進学した場合は国から支援をいただける見込みができ、真剣に大学進学を考えました。生活面から言えば、自宅から通える国立大学進学が最適であり、高校の先生からも国立大学に入り、将来、中学や高校の先生になったらどうか、とのアドバイスを受けてもいました。しかしながら、東京に〝憧れ的〟大学がありました。また、中学、高校では英語が好きでしたので、海外とつながりのある貿易関係の仕事をと決めていたので、第一志望を早稲田大学商学部にしていました。

(2) 高校生時代の暮らしぶり

私の高校時代の暮らしぶりですが、三つ違いの兄は中学卒業とともに最初は近くの鉄工所で働いていたのですが、まもなく千葉市内の製鉄会社に移っていきました。したがって、母との生活が長く高校時代の三年間は、二人だけの母子家庭でした。大学への受験勉強中には、学業以外にいろいろやりました。生活費捻出のために、家の庭でヒヨコから鶏を多く飼ったり、比較的大きな自宅の半分を貸して家賃収入を得たりしました。また、近くの〝お寺様〟から枇杷山を賃借して母と枇杷（ビワ）を栽培し、熟した枇杷を最初は近くの八百屋に籠（かご）に背負って売りに行きました。しかし、たいした金額にならず体裁の良い箱詰めにして東京などの首都圏に販売した方が利益になるだろうと、母と工夫し成功した思い出もあります。

また、現金収入の少ない家庭ですので出費を抑え、その頃、旅行らしい旅行はしたことはありません。

当然、高校の修学旅行、これは京都や奈良の関西地域でしたが、行きたかった京都への旅行も断念しました。期せずして後年、大学卒業後にJTBに入り、最初の勤務地として京都を志望し七年間働いたことは、高校時代に修学旅行に行けなかった悔しさが、どうやら心の中に残っていたのかもしれません。

Ⅱ　生涯の多くの仲間との出会い

(1) 〝アルバイト連続〟の大学生活

東京の私立大学での四年間は、予想以上に厳しいものがありました。大学入学とともに、英語関連のクラブに入ろうと最初のミーティングに出席したところ、ゴールデンウィークの「合宿訓練」の話題があがり、周囲の仲間は賑やかだったのですが、私自身は合宿どころか毎日の生活費もない・・・、したがって、四年間は一切のクラブ活動から遠のく結果となりました。その代わりに、大学時代はアルバイトに勤しむことになり、それは数えたらきりがありません。野球スタジアムでの弁当売り、デパートの中元・歳暮の配達、テレビや映画のエキストラ、引っ越し運送屋の手伝い、印刷会社の製本雑役、飲料会社の看板取り付け仕事などと、クラスのアルバイト部長的存在となってしまいました。

その時に、短時間で効率の良いアルバイトは何かを考えてみましたが、自動車運転手と家庭教師だろうということになり、大学一年の夏に運転免許証を得て、秋からすぐに運転稼業に邁進し、同時に、家庭教師では高校生と中学生の三人を大学卒業まで教えることになりました。生活費以外の授業料一括支払い時期には、集中的に前述のアルバイトに精を出しました。このように多くのアルバイトをしたわけですが、考えてみれば、自宅から国立大学に通えばこんな苦労もなかったのかもしれません。しかし、自分の希望に沿った選択でしたので、今でも後悔はありません。それ以上に、卒業後、世界各国、また、国内の様々な場面で、早稲田大学同窓生との縁が数々あり、JTB時代はもちろん、現在の学術界においても感謝することが多くあります。ついでながら、少しばかり苦労した大学での暮らしぶりです

が、「三畳」ほどの間取りの下宿屋で、同じ大学の学生十人ほどとの生活でした。しかし、ここでの生活では、生涯の友人が多く大家さん家族とは現在でも家族付き合いを行い、人生の宝となっています。

(2)唯一の楽しみ「日本全国の旅」

大変な大学時代でしたが、一番楽しんだのは、時間を見つけては、北海道・納沙布岬から鹿児島・佐多岬まで格安な周遊券を活用し、日本全国端から端まで旅をしたことです。旅行中は、宿泊代の倹約のために、夜行列車利用が多かったのですが、ある車中、見知らぬおじさんから駅弁をごちそうになったりし、旅先で〝おもてなし（ホスピタリティ）の心〟をずいぶん会得しました。このような旅体験がJTB入社に結びつき勤務してからも役立ち、さらに大学教員になって説得力のある「ホスピタリティ論」の専門講義ができる源になっているように思えます。

(3)学生時代の〝さぼり〟を挽回

大学でなおざりにした「勉強」ですが、JTBに入社し給料を得るようになってから、落ち着いて勉強ができました。長年の〝さぼり〟を猛烈に挽回すべく、二十二歳でJTBに入社してから四十歳過ぎまで、勤務終了後、土・日曜日、時には、早朝に常に各種スクールに通っていました。英語、スペイン語、中国語、イタリア語などの語学以外に、公認会計士や司法試験などの専門学校にも通い、たとえ、業務の超繁忙期であっても「行ける時に行くという覚悟」で、かなりの金額の授業料を払い込む一方、突然の海外への出張もあり、無駄にした額もかなりありました。残念ながら資格は取れませんでしたが、会計的素養や法律上の知識は、特に、海外駐在時のオーストラリアや中国での旅行会社経営で大いに役立ちました。また、大学へ転じてから、著作や論文を多く出すようになり、司法試験セミナーでの論文書き訓練が無駄でなかったことがわかりました（なお、シドニーに駐在中は、日本ではできない乗馬スクール、シドニー湾ヨットスクール、フラメンコ学

校に通い、北京時代は、もちろん、複数の先生から中国語のレッスンでした。）

Ⅲ　観光業との出会い、三十三年間勤務

(1)JTBへの入社と転勤の連続

旅行業への志望のきっかけは、大学三年生の折に北陸を旅行していた時に、たまたま列車内で向かい側に座った二人の女性がJTBの方でした。「これからの時代、海外渡航が自由になり、我が社もどんどん海外に支店を作りますよ！」と聞いた時です。旅行会社への私のイメージがガラリと変わりました。「第二外国語で勉強していたスペイン語を生かして、マドリード支店長になろう！」と思いました。海外駐在のチャンスが多いJTBを将来の職場として選択しました。その後、約十年間、高校時代から想い描いておりました海外駐在（シドニーで五年、北京で四年。残念ながら、その頃、マドリード支店はオープンされていませんでした）の経験を経ました。駐在以外は、添乗員として、または、会議や旅行企画などの出張で世界各地を回りました。

JTBでは多くの人事異動を経験しました。国内の転居を伴う人事に加えて、環境ががらりと変わる海外を二回も経験し、本人だけでなく家族全体が大騒ぎとなり、特に、子供三人を連れての海外赴任は大変なエネルギーが必要とされました。こうして旅行会社が持つほとんどの業務を経験し、加えて関連産業に関しても、例えば航空ビジネス、ホテル業などもかなりの知識を会得することができ、大学教員になってもそれらを専門科目として教えられる自信を持つことができました。

(2)旅行会社時代に頑張ったこと

JTB時代には、仕事はもちろんですが、プライベートにもいろいろとチャレンジしました。一般のサラリーマンがしない「出版」にも手を出し、これが結果的に大学教授への道を開かせてくれたようです。〝本書き〟の時間を捻出するために種々の工夫をしました。

周囲には、多くの海外駐在経験者がおりましたが、

私は少しばかり違っていました。それは帰国後に、それぞれの国に関して本を出したことです。そのため、帰国後二～三年しか持たない「駐在国のプロフェッショナル感覚」が、その後長く現在まで持続できていることです。それは講演や雑誌などの寄稿依頼があり、専門の観光分野のみならず、政治、経済、文化など広範囲な知識が要求される上に、常に最新の知識を持っていなければならないからです。その結果、私は、サラリーマン時代は〝ウィークエンド・ライター〟いわゆる、「週末作家」となり、構想練りやラフな原稿書きを、平日は通勤電車&喫茶店で、週末はパソコンに向かいひたすら打ち続けました。なお、最初の本は、シドニーから帰り「コアラの国の法律あれこれ―オーストラリア学入門」を出し、中国から帰国して、二、三冊目は、「中国にうまく滞在する法」、「中国人とうまくつきあう法」でした。四冊目は、旅行ビジネスの体験から書いた「国際ツーリズム振興論」で国際観光の入門編でした。

(3)早朝&夕刻の活用法

サラリーマンは勤務中にはプライベートなことに絶対手をつけない、これが鉄則。そのかわり「出勤直前まで」と「退社直後から」は工夫をして、思う存分自分の時間として活用すべきです。人事異動で国内のオフィスの転勤が何度かありましたが、その都度、喫茶店を〝書斎〟と考え好適な店を物色し、活用していました。毎日、出勤前の一時間ほど喫茶店で原稿書きと資料読みにあてていました。早朝喫茶店は客の出入りが多く賑やかであっても、朝は一人客の大部分は会話がなく、静かに新聞や本を読む人で邪魔されず筆が進みます。

(4)海外駐在中にいつも覚悟していたこと

海外駐在や出張が多い中で、いつも覚悟をしていたことが一つありました。母子家庭で高校時代を二人で長く過ごした年老いた母との別れです。一時帰国の都度、これが最後かもしれないと思いつつ、いつも飛行機に飛び乗って行きました。やはり現実のものとなり、それは北京駐在時に起こりました。そ

の頃、NHKラジオ「世界の街角から、こんにちは！」的な番組ですが、一年間毎月一回、インタビューを引き受けていました。偶然にも亡くなった日の午後三時に日本に向け話しかけました。その夜遅く母は亡くなったのですが、後で聞いた話ですが、放送時には危篤状態で聞ける状態でなかったということ。前日の放送、または当日の朝でしたら、死ぬ間際に北京の息子の元気な声を聞くことができただろうにと、今なお、大きな心残りです。その夜、日本から母死去の連絡があり、翌朝、北京から南房総市へ向かいました。

Ⅳ　旅行会社勤務から大学教授へ

(1)五十五歳でサラリーマン辞め転身

シドニーと北京での駐在から帰国後の七年間は、JTBワールドでアジア・オセアニアの企画・販売の責任者としての部長職に就き、同時に、取締役として世界全体のパッケージツアー経営の責任をも担い、人生の中で最も多忙で厳しい時期でした。この頃、国際観光にますます興味を持ち、特に、観光発展途上国のアジアの国々の観光活性化に熱意を持ち、各国の航空会社やホテルのマネジャーと会い、また、観光大臣、在日大使、時にはタイ国首相などとの会議もありました。国際観光の振興手法がわかるにつれ、六十歳の定年後も国際観光に携わりたいと願うようになりました。たまたま、新たな観光大学発足の話が舞い込み、一念発起し五十五歳で大学に転身しました。大阪観光大学（旧・大阪明浄大学）八年、桜美林大学七年、さらに共栄大学の二年間、教壇に立ち続け、現在、職を転じたことに全くの後悔はあり

モンゴルで開かれた「北東アジア観光フォーラム」の国際会議にゼミの学生たちを率いて参加（2008年）

ません。

(2)ライフワークの「観光立国ニッポンへの道」

二大学の常勤教授から、共栄大学の客員教授になり講義科目も減りました。今は、国の内外で国際観光の講義や講演を行っています。現在、日本は猛烈な勢いで「観光立国ニッポンの道」をめざして外国人誘致をしていますが、世界の観光先進国と比較したらまだ遅れています。どのようにしたらよいでしょうか。空港、ホテル、鉄道などのハード面ばかり整備していますが、国際観光の発展には日本国民による〝おもてなし（ホスピタリティ）〟が最も重要であり、そのソフト面での充実を講演などで力説しています。また、観光発展途上国と言われる国々、アセアンのラオス、中国の内陸部、中央アジアのウズベキスタンやイランなどの観光関係者に講義をしています。近年、頻繁に行っているのはロシアです。隣国でありながら人的交流が極めて少なく、最も伸びる可能性を秘めた国。外務省・ロシア日本センターからの依頼ですが、8年前からスタートし、サンクトペテルブルグやモスクワ、そして、極東ロシアのウラジオストク、イルクーツクなど十都市ほどを訪問しています。また、国連世界観光機関（UNWTO）から〝ツーリズム・エキスパート〟のタイトルを頂戴し、「観光国・日本」の現況を国連に報告しています。これからも、日本のみならず、世界の観光発展のために微力を尽くしたいと考えています。

タイ国政府観光局に招かれ「国際会議をいかに誘致するか」について相談を受ける。その時のタイ政府職員とのスナップ（2010年）

(3)奨学生時代の体験が今もヒントに

扇屋奨学生時代の思い出が、今なお、脳裏に深く焼き付き教育のヒントになっています。奨学生の授与式、もしくは表彰式だったか忘れましたが、南房総市から千葉市に行き、初めてデラックス・ホテルのレストランでドキドキしながら「洋食」を食べたこと。JTBを退職し大学教員をしていた頃は、毎年、学生を連れ海外や国内の研修旅行をしていましたが、通常、学生が行かない（行かれない）豪華ホテル、いわゆる「外資系五つ星ホテル」に連れていきました。そこで、コーヒー、または食事をとり、〝ドキドキ感〟を経験させ、自信を持たせるようにしましたが、この手法は、きっと昔の体験からのヒントなのでしょう。今まで多くの大学生が私の研修に参加し、単位を取り卒業していきました。

桜美林大学教授時代、同大学「国際ツーリズム」研究会」ゼミの学生たちと（2010年）

V　おわりに、奨学生のみなさまに

将来、「国際ビジネス」や「国際交流」、「国際観光」等の分野で働きたいとか、もっとこの分野のことを知りたい、という方がいらっしゃれば、いつでもご相談に応じさせていただきます。安田教育振興会事務局を通じてご遠慮なくお申し出ください。

（県立安房高校→早稲田大学）